

発表タイトル： 『フフ・トグ（青旗）』から見る宣伝の特性

読者寄稿表を中心に

1931年9月18日に南満洲鉄道爆破事件が起こり、それをきっかけに関東軍が中国東北部を占領し、満洲国が建国された。この時期、内モンゴルの東部地域は満洲国の領域に含まれ、日本に支配されていた。満洲国成立後、モンゴル語の刊行物の発行により積極的な宣伝が行われ、モンゴル人に対して文化啓蒙政策が推進された。

1939年のノモンハン事件後、興安省地域のモンゴル人を対象とした「興安振興三カ年計画」を実施することで、対モンゴルの文化政策を強化した。広報宣伝の整備に関して、「蒙古新聞の刷新拡充を図り以て啓蒙報道宣伝工作の徹底を期する」¹という方針が示された。

『フフ・トグ』は、当時の日本のモンゴル人に対する文化政策の産物であり、1941年1月6日から1945年7月23日までフフ・トグ社より新京で定期刊行されていた機関紙である。通常、第1面に国際・満洲国内の情勢、第2面に満洲国内外のモンゴル情勢、第3面以降は健康、家庭と教育欄、家畜欄、文芸欄、読者寄稿表、日本語とモンゴル語の会話、子供のフフ・トグなどが掲載されており、合計178号発行された。

主に、日本の政策を正当化し、親日的なモンゴル人の育成を目的とした機関紙であったが、読者寄稿表を通じて、モンゴル人読者（特に知識人）が意見を発信する場としても機能していた点が重要である。読者寄稿表の記事には、日本・満洲国政府の宣伝を担う「主論調」のほか、民族意識を反映した「副論調」が存在していたことが確認される。さらに、両者の間には、曖昧な言説を含む「グレーゾーン」²が形成されていた。この「グレーゾーン」においては、親日・協力的な姿勢を示しながらも、民族的主体性を守ろうとする言説が散見される。

本報告では、読者寄稿表に注目し、日本の宣伝政策がどのように展開され、それをモンゴル人読者がどのように受容・変容させたのかを明らかにすることを目的とする。具体的には、読者寄稿表における「主論調」「副論調」「グレーゾーン」の表現を分析し、満洲国モンゴル語新聞における多層的な言説空間の特性を総合的に考察する。

¹ 『興安蒙古』133ページ。

² イタリアのユダヤ系作家フリーモ・レーヴィの「グレーゾーン」概念は、二極的な善悪や敵味方という単純な見方を超えた複雑な人間関係を示す。